



# 学校だより

9月号(第572号)

令和5年8月30日

横浜市立すみれが丘小学校

## 学校教育目標

〈すすんで みんなで れいをつくして がんばりつづけて おもいあって かがやきつづけるすみれっ子〉  
～豊かな人間関係の中で、一人ひとりが自分のよさを十分に発揮し、互いに高め合う子を育てます～

## 11年ぶりのねぶた名人

児童支援専任 田中 ひづる

まだまだ残暑は厳しいながらも、あたりに響く虫の音に秋の訪れを感じられるようになりました。学校に戻ってきた子どもたちは、夏休みの楽しかった思い出をふり返り、いきいきと伝え合っています。

今年も日本の各地で伝統的な行事の風景が戻ってきたという話が聞こえてきました。4年ぶりに制限なしで開催された青森ねぶた祭りでは、青森菱友会『牛頭天王(こずてんのう)』がねぶた大賞に選ば



れました。ねぶたのモチーフは、「ねぶた師」とよばれるねぶた制作者が、国内の民俗神話や海外の歴史的な物語などを題材に構想を練ります。今回、大賞作品を制作したねぶた師竹浪比呂央さんは、「復活」をテーマに掲げて『牛頭天王』を表現しました。『牛頭天王』は青森県弘前市の金剛山最勝院護摩堂にも祀られ、疫病除けの御利益があると言われているそうです。この大賞作品には、新型コロナウイルスや戦争といった脅威から人々を守ってほしいという願いが込められているのです。国の重要無形民俗文化財に指定され、高さ5m、幅9m、重さ4トン、製作期間3か月、製作人数は300人にもおよぶ「ねぶた」が見る人に感動を与えるのは、こうした制作者の強い思いが込められているからこそだと思います。

ねぶた師は、子どもたちの憧れの職業であり、多くの人から尊敬される存在です。一方で、ねぶた師への道は極めて厳しいものです。大型ねぶたの実制作は季節労働であるため、一人前になるまで10年ほどかかると言われます。長期にわたる修業期間にも、他の定職に就くことはできません。第一線のねぶた師でも、冬の間は出稼ぎに出ることがあったと言います。竹浪さんはその厳しい状況の中、30年以上の長い「ねぶた師」期間を経て、この夏11年ぶりに「ねぶた名人」に選ばれました。長い歴史の中で「ねぶた名人」として推奨されたのは、竹浪さんを含めてわずか7名しかいません。竹浪さんは名人に選出されたことを受けて、次のように話しています。

—「私はもともとねぶたという人形灯籠そのものが大好きで、とにかくみんながあっと驚くような作品を作りたいという気持ちだけでここまで来ました。作れば作るほど反省点が出てくるので、それを次のねぶたに活かしてつくるという繰り返しの結果、名人という称号をいただけたものだと思います。私自身はこれからも変わらずねぶたを作り続けていきます。」

自分の思いを大切にすること。目標を達成するために努力を惜しまないこと。そして、同じ思いをもった仲間と信頼し合って力を合わせる。竹浪さんが大切にしてきたこと一つひとつが、偉業へと導いたのだと思います。こういった人々の思いに支えられながら、ねぶたという伝統が継承されてきたことに、胸が震えました。

子どもたちが様々な活動に取り組んでいく中で、困難なことに出会うこともあるでしょう。そんな時は一度立ち止まって、竹浪さんがそうであったように、自分が大切にしていることを見つめ直したり、やり方を考え直してみたり、周囲から力を得たりして、進むべき道を見つけてほしいと思います。子どもたちを支える私たち大人は、頼れる応援団でありたいですね。夏休み明けも、引き続きよろしく願いいたします。